OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	詩学、解釈学、そして : 英語文学を学ぶ学部学生に批評理論を期待する
Author(s)	石割, 隆喜
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2004, 28, p. 85-98
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99280
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

詩学、解釈学、そして
——英語文学を学ぶ学部学生に批評理論を期待する——

石　割　隆　喜

1

『英語青年』二〇〇二年十一月号の「英文学の教え方（I）」という巻頭特集のなかに「小説の場合——『文化を教える』という虚妄」と題された原英一氏によるエッセイがあり、そこに次のような記述がある。

> 学部の授業は二年生が対象ということもあり、小説を読む際の基本的な要素や問題点の把握の仕方を実際のテクストを題材にして解説することが主たる内容である。「語り」や「語り手」、「視点」、「プロット」、「ストーリー」、「時間」などのトピックを取り上げる。ありきたりの内容ではあっても、私が学生だったときに比べると、こうした基本事項を教えることはずいぶん容易になった。それは構造主義がもたらした恩恵である。一世代前の時代にもブルックスとウォーレンの『フィクションを理解する』、E. M. フォースターの『小説の諸相』、ブースの『フィクションのレトリック』などがあった。しかし、フランス構造主義が英米に浸透する中で、小説構造記述の体系化は急速に進化した。中でも「小説を教える」という実践技術的な面で最も貢献したのはジェラール・ジュネットをはじめとするナラトロジストたちであろう。「焦点化」(focalization)や各種の時間概念（たとえば prolepsis/analepsis）など、実際のテクストを解説する際に、旧来の用語よりもずっと理解しやすく有用であり、強

> 力な道具であることを教室で実感する。いわゆるナラトロジーの発達のおかげで、昔はかなり漠然としたものでしかなかった事柄を体系的、理論的に教えることができるようになった。(482)

学部の二年生に小説の読み方を教える際に、構造主義、特にナラトロジーが非常に有用とのことであり、また構造主義以前のテキストとしてブルックスとウォーレン、フォースター、そしてブースの著作が挙げられている。今ならこれらの系譜に連なるものとして、David Lodge の *The Art of Fiction* や Jeremy Hawthorn の *Studying the Novel* などを付け加えてもよいだろう。特にロッジの著作などは、日本の大学生用のテキストとして編み直され、版を重ねているようだ。

現在、学部レベルで批評理論を教えている大学はそれほど多くあるまい。同じ『英語青年』十一月号所収の玉井暲氏による「批評理論の教え方」というエッセイが大学院の授業についてのものであることからも推察されるように、批評理論を教えるのは大学院になってからというのが一般的な見方であろう。

本論は、そうした傾向にも拘らず、英語文学を学ぶ学部学生に批評理論を教えることが必要なのではないかと提案するものであるが、そのように考えるのは、何も先の玉井論文と違うことを言いたいがためでも、あるいは『文学部唯野教授』を読んでいるからでもない（ただし唯野教授は侮れない)。私は学部四年生の時に約一年間、幸運にもアメリカの大学で勉強する機会に恵まれたが、そこで、英文科(English)ではなく比較文学科(Comparative Literature)に、その名も “Literary Criticism” という授業があるのを見つけ（それは Comp Lit 371 という授業だった)、ぜひ受講したいと思ったのだが、ウェイティング・リストにキャンセル待ちの学生がすでにかなりいることを知って、結局取らずに終わったということがあった。今から考えれば、たとえもぐりでも授業だけは聴いておけばよかったと思うのだが、それでもテキストだけは購入した。記憶に間違いがなければ、それらは Catherine Belsey の *Critical Practice*、

K. M. Newton の *Twentieth-Century Literary Theory*（ちなみにこれらの二冊は現在、第二版まで版を重ねている）、そして Adams と Searle の *Critical Theory since 1965*であった。もともと批評理論に興味があった私は、たとえ英文科ではないにしても、大学できちんと批評理論の勉強ができるということにいたく感動したことを憶えている。

このようなアメリカでの個人的ないわば原体験が、日本の大学でも学部レベルで批評理論を教えることが大切なのではないかという私の考えのもとになっていることは確かなのだが、さらにもう一つ、そのように考える理由がある。こちらは現在の日本の大学における英語文学教育の現実の有り様と直結することなのだが、そもそも、たとえ学部レベルにおいては批評理論そのものを教えることは少ないにしても、それに近いことは、実はかなりの程度まで行われているのではないかと思えるのである。これは言い換えれば次のようになる。冒頭に挙げたナラトロジーを、学部学生に小説を教える際に有用なものにとどめておくのではなく、さらにもう一段階大きな枠組み――批評理論そのもの――のなかに位置付け直す必要があるのではないか、それも学部レベルの英語文学教育のなかでそれを行う必要があるのではないか。

2

Jonathan Culler は一九八一年出版の *The Pursuit of Signs* の増補版を二〇〇二年に出すに当たり、新たに序文を付け加え、そこでナラトロジーについて次のように述べている。

> What is true of semiotics in general is also true for narratology, the systematic study of narrative, which was developed with much fanfare during the heyday of structuralism in the 1960s and 1970s but which has languished since then, even though we have not satisfactorily answered the basic questions about how we identify plots, how we recognize satisfactory endings and so on. Critics are more interested in interpreting novels than in trying to spell out how we go about

understanding them as we read. (x)

カラーは初版出版当時の二十年前を振り返り、それ以降ナラトロジーが下火になってしまったのは、批評家の興味が結局のところ小説の体系的な分析と記述よりも解釈 (interpretation) の方にあるからだとしている。彼はさらにこの区別を「詩学」("poetics") と「解釈学」("hermeneutics") の区別として端的に言い換えてもいる(xi)。

これがどういうことかと言うと、先の原氏のエッセイにあるように、大学の英語文学の授業でナラトロジーの成果を利用しつつ小説の読み方を教えることは、小説の解釈の仕方ではなく、小説の詩学を教えていることになるということだ。そしてカラーにしたがえば、こうしたことは究極的には記号論 (semiotics) の範疇に属することになる（ちなみに原論文においては、ナラトロジーは構造主義との関係で語られていた)。カラーは記号論の営みを、言語学に譬えて次のように説明している。

> From the semiotic point of view, however, it was clear that the task was not to produce new interpretations but to construct an account of the rules and conventions, the system of signification, if you will, that enabled cultural objects to function as they do—to have the meanings that they do for members of a culture. The task of linguistic is not to produce a new and subtler interpretation of "The cat is on the mat," showing that we have been wrong all along in our understanding of this sentence, but rather to offer an account of the rules of English that account for the meaning this sentence has for speakers of the language. Similarly, semiotics made it clear that the task of a science of signs was to understand the conventions and the functioning of the sign systems that make up the human world. (viii–ix)

これをナラトロジーに当て嵌めて考えるなら、"The cat is on the mat" という

アルファベットの羅列がいかに英語として意味あるセンテンスとなっているかを明らかにし、記述するのが言語学であるとすれば、ある物語、たとえば"Cat in the Rain,"「雨のなかの猫」という名の短篇が、どのような規則と約束ごとに則って意味ある記号の体系すなわち物語として成立しているかを、「語り手」や「焦点化」、「プロット」や「ストーリー」といった点に着目しながら分析し、記述するのがナラトロジー、すなわち物語の科学ということになる。記号論的、あるいは詩学的に小説を読むということは、言語学的に小説を読むことに譬えられるだろう。あるいはまた、小説が「いかに」意味ある記号の構造体となっているか、小説の"How"を読むことだという風に言ってもよいかもしれない。

小説の"How"を読むとは小説の"What"を問わない読み、雨のなか小さくうずくまっている猫が何を意味しているかという解釈、interpretationには関心を払わない「反解釈」としての読みということになるのだが、カラーはそのような読みを特徴とする方法論として、Hans Robert Jaussの*"Rezeptions-ästhetik"*とFredric Jamesonの"dialectical criticism"を挙げている(12–13)。私がここで注目したいのはジェイムソンの方なのだが、無謀を承知でその方法論を要約するとすれば、たとえばEmily DickinsonのものであれWallace Stevensのものであれ、一篇の難解な詩があったとして、その難解さをきれいに解きほぐして解消するのではなく、すなわちこれこれを意味するという風に解釈してしまうのではなく、難解さを難解さとしてそのまま受け止め、その難解さそのものが因って来る歴史的社会的状況の方をこそ問題にする、そういう批評のやり方がジェイムソンの弁証法批評だと言ってよいだろう。ジェイムソン自身は*Marxism and Form*のなかで次のように言っている(ちなみにカラーは以下の引用部分の最後の"Thus"以下のセンテンスを自身の著作に引用している。)

Thus, faced with obscure poetry, the naïve reader attempts at once to *interpret*, to resolve the immediate difficulties back into the transparency of rational thought;

> whereas for a dialectically trained reader, it is the obscurity itself which is the object of his reading, and its specific quality and structure that which he attempts to define and to compare with other forms of verbal opacity. Thus our thought no longer takes official problems at face value, but walks behind the screen to assess the very origin of the subject-object relationship in the first place. (*Marxism and Form* 341; Culler 12)

あるいはこうしたことと同列に扱ってよいのか迷うところではあるが、同じ難解ということでジェイムソン自身の文体を例に挙げてもよいかもしれない。ジェイムソン自身あるところで、自分の難解な文体を“handicraft”すなわち「手工芸品」に譬えており (Roberts 7)、これはつまり、丹誠込めて練り上げられた難解な文章は、社会全体が大量生産大量消費を原理として動いているなかで、だからこそ疎外されていない人間性による手仕事に意義があり、まさにそういう理由で生まれたものであるということなのだが、要するにわれわれは、ジェイムソンの難解な文章を読むに当たって、それを完全に透明性を獲得するまで読み解く必要はなく、乱暴に言えば何が書いてあるか分かる必要はなく、その文体の物質性の向こうに高度資本主義というもう一つの物質性を見ればそれでよい、それこそがジェイムソンの文体を生んだ原因であり社会的状況であることが分かればそれでよいということだ。[1] これはある意味、われわれにとって非常に勇気づけられる読み方であるのは間違いないだろう。

しかしながら、カラーによって「反解釈」の例として挙げられているジェイムソンだが、われわれはジェイムソンを記号論の方に引き寄せるカラーの議論に納得しながらも、やはり同時に、果たしてそうなのかという思いも抱かずにはいられないのである。なぜならわれわれは、ジェイムソンがマルクス主義批評家であり、彼の *The Political Unconscious* の第一章が“On Interpretation”(「解釈について」)と題されており、そのなかで彼が次のように言っていることを知っているからだ。

> These matters can recover their original urgency for us only if they are retold within the unity of a single great collective story; only if, in however disguised and symbolic a form, they are seen as sharing a single fundamental theme—for Marxism, the collective struggle to wrest a realm of Freedom from a realm of Necessity; only if they are grasped as vital episodes in a single vast unfinished plot [. . .]. (19–20)

つまり、ジェイムソン的な方法論は一見解釈を拒絶し、テクストの意味ではなくそれを生んだ歴史的社会的状況の方をこそ問題にしているように見えながらも、最終的にはテクストをいかにもマルクス主義的な一つの物語でありテーマ——「単一の大きな集合的物語」であり「単一の根本的主題」——へと回収していると言わざるをえないのである。一つのテーマに沿ってテクストを読み解くとは、たとえそれが他のあらゆるテーマを包摂する究極的なテーマであったとしても解釈にほかならず、したがってカラーの議論にも拘らず、ジェイムソンを詩学の陣営に引き込む試みは問題なしとしない（こうした問題は、ジェイムソンが Deleuze と Guattari と同様に、すべてを個人の心理に還元するとしてフロイト的解釈モデルを批判しながらも、解釈そのものを捨て去ることなく、マルクスをモデルに "some new and more adequate, immanent or antitranscendent hermeneutic model" ["On Interpretation" 23] を打ち樹てようとしていることと関係しているかもしれない)。このことはまた、カラーが解釈のなかでも特に重視する "symptomatic interpretation,"「症候的解釈」を考えてみても明らかである (Culler xi)。たとえば『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』の "symptomatic reading"（「徴候的読解」）の項には、ジェイムソンの「政治的無意識」の概念が例として挙がっているのである。

このようにジェイムソンにおいて詩学と解釈学の区別がもはや適当なものでなくなっている理由を、たとえばカラーの *The Pursuit of Signs* が *The Political Unconscious* と同じ年に出版されたために議論のアップデートができなかったせいであるとか、あるいはジェイムソン自身、*Marxism and Form* と *The Political*

Unconscious との間に方法論的に断絶があるからだという風に考えることも可能だろう。[2] しかし、詩学ー解釈学という二項対立が脱構築される、あるいは弁証法的に発展的解消を遂げている例は、ジェイムソン以外にも実は数多く存在するように思われる。たとえばカラーはカルチュラル・スタディーズについて次のように述べている。

> Often aggressively resistant to the privileging of high culture over mass culture or popular culture and to what it would see as excessively ingenious interpretations of individual texts, cultural studies can be seen as the heir to semiotics in its interest in understanding cultural practices. This affinity has been obscured by the fact that the announced goal of cultural studies is not scientific but political, not to create a science of signs but "to make a difference." (xiii)

まるで記号論の失墜した権威の回復を図るためでもあるかのように、カルチュラル・スタディーズが記号論の継承者として位置付けられている。カラーによれば、カルチュラル・スタディーズと記号論のこうした類縁性がしばしば忘れ去られてしまうのは、カルチュラル・スタディーズの「政治的」な側面が強調されすぎている嫌いがあるからだということになる。しかしわれわれはここで、カラーの方こそカルチュラル・スタディーズの「政治的」な面を忘れ去ろうとしているのではないか、より端的に言えば、カルチュラル・スタディーズが行う「政治的な解釈」すなわち interpretation を忘れ去ろうとしているのでないかと問うてみることができるのではないか。カルチュラル・スタディーズの行う「政治的」な読みが、階級、人種、ジェンダー、そしてセクシュアリティといった内容であり中身、すなわち "What" を抜きには考えられない以上、それはジェイムソンのマルクス主義的方法論と同様、解釈としての性格をもつものとならざるをえないのであり、カラーはこうした「政治的」な読みを含んだものとしてのカルチュラル・スタディーズから、いわばその骨組みである構造主義的ないしは記号論的な要素だけを抽出しようと

しているように思われる（読者がカラーの論の運びあるいは文章そのものに感じる透明感はこのあたりに由来するのだろう）。このことは、カルチュラル・スタディーズの発展に大きな影響を与えたテクストとして Roland Barthes の *Mythologies* を挙げておきながら、その影響力の理由を、それが記号論的に分析する文化現象がカルチュラル・スタディーズ同様多岐に渡っていることにのみ求めている点に端的に窺える。カラーはこう言うのだ。

> Cultural studies has its roots in the cultural analysis of British Marxism, but also in semiotics, particularly Roland Barthes' *Mythologies*, with their pioneering interpretations of cultural objects of everyday life, from cars and detergents to wrestling and Einstein's brain. (xiii)

カラーがここでバルトの行ったことに対して "interpretation" という語を使わざるをえないことにも、いかにカラーの議論が一面的であるかが見て取れるだろう。バルトのテクストが "mass-culture" あるいは "petit-bourgeois culture" という中身であり「実質」と呼ばざるをえないものに対する "ideological critique" でもあったことが、綺麗に抜け落ちているのである (Barthes 9)。

問題は、なぜこうした詩学と解釈学の区別がある時点で無効になってしまうのかということなのだが、おそらくこれは、詩学的な方法論が文化全体社会全体に応用されれば必然的に生じることだと考えられる（応用以前にもそうなのだろうが）。つまり文化的社会的意味生産を可能にしている様々な規則なり約束ごとは、カラー流の記号論が前提としているようには無色透明なものではありえないということだ。[3]唯物論の効用はこのあたりに求められるだろうし、また文化を動かす「権力」("power") という "What" を相手にする Stephen Greenblatt の方法論が、「文化の詩学」という相反するものの併置、"What" と "How" の併置によってのみ名付けられうるものであることを見ても、こうしたことは明らかである。

3

要するに私が言いたいのは、ナラトロジーを使って学部学生に小説の読み方を教えるだけでは踏み込みが足りないということ、ナラトロジーという道具を手にすれば自動的に詩学から解釈学へ、そしてその二項対立が無化される地平へと、すなわち小説あるいは文学だけではなく物質性をもった「文化」全体と向き合わねばならなくなる地平へと至るはずなのに、それをしない理由はないということである。たとえば学部の英文学教育ではお馴染みの文学史一つを取ってみても、いかに Frederick Douglass や Charlotte Perkins Gilman がごく最近まで忘却されてきたかというそのメカニズム、すなわち "How" を語るだけで、その向こうにあるいわゆるアメリカニズムという "What" を説明する必要に迫られるはずだ。あるいはこれほど高級ではない別の例を挙げるなら、学生は「小説の技法」を教わるとたちまち小説が分かった気になってしまうのだが、少なくともその技法と基本的には同じものが、文化というはるかに巨大なものの形成に関与しているのだということを知れば、こうした傲慢さもある程度は抑制され、それなりの謙虚さを身に付けるようになるのではないか。近年の批評理論においては、確かにポストコロニアルやセクシュアリティといった "What" が横行していることは事実だが、それが単なる還元主義を示すものではなく、小説を読む際に有用なものとしてわれわれが利用するまさに poetics から読み解くべきものであるということを、教室での実践により伝えてゆく、こうしたことがまさに学部において必要とされているのではないだろうか。(またこうした様々な "What" という強敵の存在だけでも知ることで、依然として教室に取り憑いている「作者の意図」という、おそらくはもっとも手強い "What" を、少なくとも相対化することぐらいはできるように思われる。)

*本稿は、阪大英文学会第35回大会（2002年11月9日、於大阪大学）におけるシンポジウム、「『英文科』に何を期待するか」での口頭発表原稿に加筆修正を施したものである。

注

1. 別のところでジェイムソンは、ポストモダニズムと称される文化状況下でなぜ「偉大な作家」が消えてしまったのかという問題を考察しながら、Joyce に代表されるモダニズムの作品を「手工芸品」になぞらえている。フォード方式の流れ作業組み立てラインとジョイスが同時代に共存しているのは、社会全体の構成要素である諸領域（Althusser にしたがえばそれらは semi-autonomous である）それぞれの発展するスピードが異なるという "uneven development" のせいであり、"older forms of individual production" の特徴を色濃く残す芸術の領域そのものが、より人間的な生産が行われていた時代を偲ばせる過去の遺物（ただしユートピア的な）だというのである（*Postmodernism* 307)。Raymond Williams の "residual" の概念を想起させるこの指摘にしたがうなら、「偉大な」ポストモダン作家といってよい Thomas Pynchon はさらなるタイム・ラグにより誕生した大いなる時代錯誤と言えそうだが（ただしジェイムソンは続けて、一般論としてであろうが "the postmodern must be characterized as a situation in which the survival, the residue, the holdover, the archaic, has finally been swept away without a trace" [309] と述べている)、より興味深いのは、ジェイムソンがさらに別のところで、「手工芸品」としてのモダニズムにおける「手」を「指紋」("fingerprint") と言い換えていることである (*Cultural* 6)。「署名」("signature" [*Signatures* 160]) にも譬えられるこの場合のモダニズム、すなわち William Faulkner や D. H. Lawrence、Heidegger や Mahler のマンネリ寸前とも言える独特の（つまり個体特有の）スタイル、「個＝性」は、過去の手作業の名残りとはまったく逆に、社会全般にわたって進行する断片化と私(わたくし)化の傾向、来るべきポストモダン文化における "the linguistic norm" の消滅を "foreshadow" するものと捉えられている (*Cultural* 4–5)。

　こうした孤島と化した言語、まったくの私的言語としてのモダニズム文学は、当然ながら社会全体を捉えることができないもの、「真」ではない文学となる ("if we can make a work of art from our experience, if we can tell it in the form of a story, it is no longer true; and if we can grasp the truth about our world as totality, as something transcending mere individual experience, we can no longer make it accessible in narrative or literary form" [Jameson, "Beyond" 131])。これは言い換えれば、モダニズム文学が提示不可能なものを提示しようとして（個と全体の乖離を乗り越えようとして）格闘する「崇高」な文学だということなのだが（モダニズム文学におけるこの「崇高」あるいは乖離をポストコロニアル批評的に言い直せば "The truth of that limited daily experience of London lies, rather, in India or Jamaica or Hong Kong" となるだろうし [Jameson, "Cognitive Mapping" 349]、あるいはまた、"national allegory" となりえない「第一世界」のテクストにおける「フロイトとマルクスの仲違い」とも言え

るだろう [Jameson, "World Literature" 141]。ちなみに現代の "mass culture" におけるこの「仲違い」を解消しようと試みたものが、例えばジェイムソンの *Dog Day Afternoon* 論である [*Signatures* 35–54])、興味深いのは、ジェイムソンが "subjectivized untruth" ("Beyond" 131) というジレンマに囚われたモダニズム作家の例として挙げている Hemingway やフォークナーが、Irving Howe のポストモダン論においては小説家としてより "happily placed" だとされていることである(すなわちハウは、モダニズムの文学を「崇高の文学」とは捉えていない)。ハウにとって、第二次世界大戦後に登場した「若い」作家たちは、"Fitzgerald's absorption with social distinctions, Hemingway's identification with expatriates, Faulkner's mourning over the old South" に匹敵するものを決定的に欠いており (Howe 134)、加えて "mass society" という不定形で表象不可能な社会を相手にせざるをえないがゆえに、「モダン」ではなく「ポスト・モダン」な作家となったのである。しかし、ジェイムソンとハウとの間に認められるこのモダニズム観の相違は、どちらも結局のところ「崇高」を(この語自体をモダニズムを論じる際に直接的には用いていないにせよ)議論の軸に据えているという点で(そしてやはりハウのモダニズムの小説家も、最終的にはジェイムソンの言うように「崇高」の小説家だと考えられる点で)、それほど大きな問題ではないように思われる。

2. この断絶は次の二つのセンテンスを比べてみれば明らかである。それぞれ *Marxism and Form* 最終章と *The Political Unconscious* 第一章冒頭の一文である。"What we have called interpretation is therefore a misnomer: content does not need to be treated or interpreted, precisely because it is essentially and immediately meaningful in itself [. . .]" (*Marxism* 403); "This book will argue the priority of the political interpretation of literary texts" ("On Interpretation" 17). ただし、もし仮にこれら二つによって示されるものが断絶と呼ばれる何かではないとすれば、後者の "political interpretation" が「解釈」と名付けられているにも拘らず、おそらくはその究極性—— "the absolute horizon of all reading and all interpretation" ("On Interpretation" 17) ——のゆえに、前者の所謂「メタコメンタリー」、すなわち "dialectical criticism" と同じ批評的営みを指すということになるのだろう。

3. またカラーは脱構築について "I would say that the insights deconstruction offers into the functioning of language and texts constitute the most important modern contribution to our understanding of signification" (xiii) と述べ、記号論と脱構築は相容れないものであり、記号論はポスト構造主義の登場により過去のものとなったという見方に反対する。しかながら、このように脱構築をも "the mechanisms of meaning" (xii) の解明に貢献するものと捉えることで、カラーは西洋形而上学のロゴス中心主義に対する批判という脱構築がもともともっていた政治性、すなわち "What" に対する指向性

を骨抜きにしてしまっていると言えよう。カラーは脱構築を脱色ないしは漂白しようとしているのであり、事実 “deconstruction characteristically proceeds by intricate, complex readings of texts” と述べ (xiii)、脱構築の解釈へと流れがちな傾向を批判している。

Works Cited

Adams, Hazard, and Leroy Searle, eds. *Critical Theory since 1965*. Tallahassee: Florida State UP, 1986.

Barthes, Roland. *Mythologies*. Trans. Annette Lavers. New York: Noonday, 1972.

Belsey, Catherine. *Critical Practice*. London: Routledge, 1980.

Culler, Jonathan. *The Pursuit of Signs: Semiotics, Literature, Deconstruction*. Augmented ed. Ithaca: Cornell UP, 2002.

Hawthorn, Jeremy. *Studying the Novel*. 4th ed. London: Arnold, 2001.

Howe, Irving. “Mass Society and Post-Modern Fiction.” *The American Novel since World War II*. Ed. Marcus Klein. Greenwich: Premier-Fawcett, 1969. 124–41.

Jameson, Fredric. “Beyond the Cave: Demystifying the Ideology of Modernism.” *The Ideologies of Theory: Essays 1971–1986*. Vol. 2. Theory and Hist. of Lit. 49. Minneapolis: U of Minnesota P, 1988. 115–32.

——. “Cognitive Mapping.” *Marxism and the Interpretation of Culture*. Ed. Cary Nelson and Lawrence Grossberg. Urbana: U of Illinois P, 1988. 347–57.

——. *The Cultural Turn: Selected Writings on the Postmodern 1983–1998*. London: Verso, 1998.

——. *Marxism and Form: Twentieth-Century Dialectical Theories of Literature*. Princeton: Princeton UP, 1971.

——. “On Interpretation: Literature as a Socially Symbolic Act.” *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. Ithaca: Cornell UP, 1981. 17–102.

——. *Postmodernism, or, the Cultural Logic of Late Capitalism*. Durham: Duke UP, 1991.

——. *Signatures of the Visible*. New York: Routledge, 1992.

——. “World Literature in an Age of Multinational Capitalism.” *The Current in Criticism: Essays on the Present and Future of Literary Theory*. Ed. Clayton Koelb and Virgil Lokke. West Lafayette: Purdue UP, 1987. 139–58.

Lodge, David. *The Art of Fiction*. Ed. Norio Uchida and Katsuaki Watanabe. Tokyo: Eihosha, 1996.

Newton, K. M., ed. *Twentieth-Century Literary Theory: A Reader*. New York: St. Martin’s, 1988.

Roberts, Adam. *Fredric Jameson*. London: Routledge, 2000.

「Symptomatic Reading (徴候的読解)」『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』ジョゼフ・チルダーズ、ゲーリー・ヘンツィ編、杉野健太郎・中村裕英・丸山修訳、松柏社 (1998).
玉井　暲　「批評理論の教え方── 批評理論の多様性とコミットメントのはざまで」『英語青年』148 (2002) : 478–79.
原　英一　「小説の場合── 『文化を教える』という虚妄」『英語青年』148 (2002): 482–83.